

## E・ベルツの憑依論について

安井 広

一八七九年（明治一二）小池正直がベルツを訪ねた時、  
たまたま Grisinger の精神科の書を調べていたベルツは  
狐憑きが一種の精神病であることを説いたという。ベルツ  
が一八八五年（明治一八）に書いた「狐憑病説」によると、  
五年前一八八〇年（明治一三）にこの病気について簡単な  
説明を公にしたとある。ベルツが著わした内科書のうち  
『内科病論』には本病の記載はないが、のちの『鼈氏内科  
学』には「解剖的原因不明ナル神経症」の一として「狐憑  
病」を挙げている。当時の内科書で憑依を述べているのは  
すくなく、また Wunderlich の病理学書にも本症について  
の記載はない。ベルツが本病について最後に書いたのはド  
イツ帰国後一九〇六年（明治三九）ドイツ自然科学者医学  
者会議で行なった講演を翌一九〇七年に Wiener med.  
W-schr. に連載した長文の “Ueber Besessenheit u. ver-

wandte Zustände”である。

憑依というのは人が自分の体の中に悪魔とか動物などが  
宿っていると考える妄想によるもので、歴史上多く見ら  
れ、ヨーロッパでは悪魔が宿ると考えることが多いが、ア  
ジアでは土地によって違うがいろいろの動物が宿ると考え  
ることが多く、日本では狐が最も多い。榊俣教授はこれを  
Alopecanthropic と命名した。ほかに犬、蛇、狸などもあ  
る。狐憑病にかかるのは女性が多く、特に精神的な悩みを  
持ったり体力の消耗した時、ある種の動機により被害妄想  
にとりつかれてなるのであるが、患者は必ず狐憑きとい  
うものがあることを予備知識として持っている者に限る。

憑依が二重意識の状態であることは明らかであるが、ベ  
ルツが下意识の力を認めて論じたのは最終の一九〇七年の  
論文で、ここでは冒頭に Jastrow の “The Subconscious”  
を参照したことを述べている。そのころすでに Freud の  
精神分析に関する論文はいくつか発表されていたが、ここ  
には精神分析の語はみられない。なお Freud はベルツよ  
り七年後輩である。

ベルツは本病の二重意識を説明するのに大脳の両半球が

各側独自に機能を営むという考えを持っていた。このことは「狐憑病説」にも見え、狐憑きの患者が狐の言語を発する時は右脳半球が作動するため、まず左の胸に異常感覚を覚え、左の口のまわりと左腕に搐搦をおこし（「狐憑病説」

いかと言っているようで、ベルツの考えと全く一致している。

訳文には「右側ノ顔面及右上肢」とあるが、一九〇七年の独文に左としている。それから鋭い狐の声を発するが、はじめはその語は不明瞭で次第にはっきりしてくる。つまり平常患者自身が発言する時は左脳が作動しているが、右脳の作動に移る時、右脳に支配される左半側の体部に異常緊張をきたし、やや時間を経過して語を発するに至ると説いていゝる。ベルツはこの考えを持ち続け、一九〇六年の講演でも述べたがこれは受けいれられなかった。内村祐之教授も言っているように大胆な仮説である。しかし、最近左右両脳半球の個々の機能が論ぜられ、まだ不明確な点が多いようであるが、左半球はおもに分析的な思考、特に言語や理論に關与するとし、これに反して右半球は思考の創造的な面に関係があり、精神活動のうち創意に富んだ探究的な面でその役割が見られるとする。夢、催眠術も右脳に關係するといゝ、ある研究者たちは右脳は無意識な精神の場ではな